The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Death Competencyの構造と尺度作成
Author(s)	藤本, 欣也; 本多, 妙
Citation	臨床死生学年報. 2003, 8, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Death Competency の構造と尺度作成

藤本欣也
本多　妙

key words：Death Competency，デス・エデュケーション，死の不安，死の恐怖，死別経験

要約

Death Competency とは「死に対処するための能力」である。本研究では、Death Competency の構造を明らかにし、それを測定する尺度を作成することを目的とした。調査者を中心とする心理学専攻の大学生、大学院生によってブレーンストーミングを行い、質問項目を作成した。調査は大学生、大学院生を対象に行った。探索的因子分析の結果、「身近に起こりうる死について考える能力」、「身近に起こりうる死に対処する能力」、「死に対する親和性」、「他者の死を受けとめる能力」、「死を意味あるものと認める能力」の5因子が抽出された。他尺度との有意な相関がみられ、基準関連妥当性は確認された。また、Cronbach の α 係数を算出したところ、全ての因子において高い信頼性が得られた。さらに、Death Competency は「自分に身近な死に対する能力」と「概念的な死に対する能力」の2つに大きく分類されることが明らかになった。

1．はじめに

これまで多くの研究者が、デス・エデュケーションの効果を測る際に、死の不安を測定する方法に頼ってきた。しかし、デス・エデュケーションの効果を評価するために、死の不安の軽減にばかり依存することは、デス・エデュケーションの効果の解釈を難しくしている（Peal, Handal, & Gilner, 1981-82; White, Gilner, Handal, & Napoli, 1983-84）。なぜなら、デス・エデュケーションによって得られる変化は、不安の軽減ばかりで測られるものではないからである。したがって、デス・エデュケーションの効果を評価するためには、死の不安や恐怖の軽減だけではなく、「死」というものに対する他の側面の変化も測る必要があると言えるのではないかと考えられる。

Robbins（1994）によると、デス・エデュケーションの効果を評価する際に、Death Competency に注目することが重要である。Death Competency とは、死に対してうまく対処しようとする能力のことである（Robbins, 1990-91）。Death Competency を測定する尺度として、Coping with Death Scale（Bugen, 1980-81）が挙げられる。この尺度は、ホスピスで働くボランティアのためのトレーニング過程で発達したものであり、トレーニング後に見られる特殊な対処能力を含むものである（Wong, Reker, & Gesser, 1994）。例えば、「私は葬儀の手はずについてよく知っている」、「遺体処理に様々な選択肢があることを知っている」など、葬儀に関する項目などが挙げられる。したがってこの尺度は、医療従事者に対する職業訓練と

してのデス・エデュケーションにおける効果を評価するものとしては適しているかもしれないが、医療などに従事していない一般の人の死に対する対処能力としての Death Competency を測る尺度としては適していないものと思われる。

本研究では、Death Competency を「死に対処するための能力」と定義する。「対処する」とは、Kubler-Ross (1969) が言う、死に行く過程の最終段階としての「死の受容 (death acceptance)」とは異なるものである。死の受容については様々な研究がなされている。例えば、Wong et al. (1994) は、死の受容を、死を迎えるための心理的な準備であるとして、死の受容に焦点を当てた Death Attitude Profile－Revised (DAP-R) という尺度を作成した。また Klug & Sinha (1987) は、死の受容を自分の死を比較的気楽に認識していることと捉え、自分の死の見通しに対する理論的な知識と、死ぬという結果を前向きに受けいれることと定義して、Death Acceptance Scale を作成した。しかし、これらの研究はいずれも、死と直面することを前提としたものである。死を目前にしていない、あるいは死と接する機会のない人にとって、死への直面を前提とすることは大変難しいことであると思われ、このような人々に対して「死の受容」を測定する尺度を適用することには疑問が残る。むしろ、「死の受容」と「死に対処すること」とを区別し、後者に注目する方法を模索する必要があると考えられる。

「死に対処する」能力について、Lester (1990) は、死と死にゆくことに対する態度は違うものであり、その対象が自分であるか他人であるかによっても異なるとして、「自己の死」、「自己が死にゆくこと」、「他者の死」、「他者が死にゆくこと」に対するそれぞれの恐れを測定する下位尺度を持つ Collett-Lester Fear of Death Scale を作成している。このように、死に対する恐怖だけではなく、死に対処する能力も、対象の違いによって変化するのではないかと考えられる。よって、「自己の死」・「他者の死」についてのそれぞれの能力について考える。

しかし、「他者の死」といっても、家族や友人など、親しい人の死に対する態度と、テレビなどで伝えられる事故や戦争などの犠牲者に対する態度にも違いが見られるのではないかと考えられる。第三者の死に対する態度についての研究はほとんどなされていないが、現代は事件や事故、戦争、テロ、災害など、さまざまな形であらゆる世代に死が起こりうる時代である。よって、このような現実に起こりうる死を直視することは有意義なものである (丹下, 1999)。以上から、ここでは「他者の死」を、「家族や友人など親しい人の死」・「事故や戦争などの犠牲者など、報道される他人の死」に分類して考えることにする。

さらに、死を目前に控えていない人や、身近な人との死別を経験したことのない人が死について考える際、単に身近に起こりうる現実として死をとらえるだけではなく、対象を限定して考えず、「死」という概念について意識することも多いと考えられる。今井 (1991) の行った研究によると、死に対する態度は、不安などの感情的反応だけではなく、命の尊さ、自分の生き方の自覚など、多くの内容が死に対する態度に関連しているという。そのため、死に対する対処能力としては、現実としての死と向き合う態度だけではなく、命の尊さ、自分の生き方の自覚などとの関連を含めた、概念としての「死」をどのように考えるのかという側面からも測定する必要がある。

「死」に対する態度には、大きく分けて２つの態度があるのではないかと考えられる。１つは死をあるがままに受けとめる態度である。死はすべての生き物に必ず訪れるものであり、逃れることは不可能である。ならば、死は自然なものであると考え、死を身近なものと捉えることで、「死」に対処することができるのではないかと考えられる。もう１つは、「死」の持つ意

味を認める態度である。これは、「死」があるからこそ人生が有意義なものになる、あるいは、命あることが尊いのだと考える態度である。「死」に対処するために「死」に意味を与え、それによって「死」を認めようとするのではないかと考えられる。

よって本研究では、「自己の死」・「家族や友人など親しい人の死」・「事故や戦争などの犠牲者など、報道される他人の死」に対する対処能力と、「死」をあるがままに受けとめる態度・「死」の持つ意味を認める態度といった「死」という概念に対する対処能力を測定する尺度を作成することを目的とした。これらを項目とする尺度を作ることによって、不安と恐怖の軽減という観点によってのみ評価されてきたデス・エデュケーションの効果を、違う側面から評価することができると考える。

2．方法

2—1．尺度作成

心理学を専攻する大学生、大学院生6人で、「死に対処する」というテーマについてブレーンストーミングを行い、項目を考えた。その結果36項目が挙げられた。回答方法は、「あてはまらない」を1点、「かなりあてはまらない」を2点、「ややあてはまらない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまる」を5点、「かなりあてはまる」を6点、「あてはまる」を7点とする7件法とした。

質問紙の基準関連妥当性を検討するため、「死に対する態度」を多面的な視点から捉えなおした丹下（1999）の「青年期における死に対する態度尺度」38項目と、Templer（1970）の「死への不安尺度（Death Anxiety Scale)」15項目も同時に測定した。丹下（1999）の「青年期における死に対する態度尺度」の回答方法は、「全くそう思わない」を1点、「ややそう思わない」を2点、「どちらでもない」を3点、「ややそう思う」を4点、「非常にそう思う」を5点とする5件法とした。また、Templer（1970）の「死への不安尺度（Death Anxiety Scale)」は、「はい」を1点、「いいえ」を0点とする2件法とした。

対象者の属性の項目として、性別、年齢、学部、近親者の死別経験の有無、死別経験がある場合、その経験からの年数を尋ねた。

2—2．調査

調査は、大学生、大学院生を対象に行った。350部の質問紙を配布し、有効回答数は217であった（有効回答率62%)。内訳は男性72名、女性145名であり、平均年齢は20.18±3.68歳であった。調査を行うにあたって、被調査者の匿名性やプライバシーを保護するために、無記名方式を採用した。なお、本調査は2002年7月から8月の期間に実施した。

2—3．統計解析

統計解析には、SPSS for Windows 10.0J（Spss Inc., 2000)、SEFA2001（Kano, & Harada, 2001)、EQS5.6（Bentler, 1995）を用いた。

3．結果

3—1．Death Competency 尺度の下位尺度化

まず、項目得点の偏りがある項目として平均値が5.5以上、もしくは2.5以下であった項目

表１　Death Competency 尺度の探索的因子分析結果（N=217）

項目	因子負荷量
Ⅰ.身近に起こりうる死について考える能力（ =.831）	
自分の死について真剣に考えることができる。	.85
「死」とはどういうものかを考えることができる。	.70
自分の死について誰かと語ることができる。	.68
家族や親しい人の死についてだれかと語ることができる。	.67
家族や親しい人の死について真剣に考えることができる。	.62
Fit index　GFI=.982　AGFI=.946　CFI=.987	
Ⅱ.身近に起こりうる死に対する対処能力（ =.767）	
自分の死に対して心の準備をすることができる。	.64
家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる。	.63
たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う。	.63
たとえ自分が近い将来死ぬことになっても冷静に対処することができると思う。	.62
「死」をごく自然なものであると受けいれることができる。	.62
Fit index　GFI=.962　AGFI=.887　CFI=.929	
Ⅲ.死に対する親和性（ =.750）	
自分が死ぬのはまだまだ先のことであり、考える必要はない。	.75
現在の自分には、「死」は関係ないと思う。	.62
自分の生活において「死」は決して遠いものではない。	.55
いつ訪れるかわからない「死」について普段から考えることは不快である。	.53
自分の死を想像することができない。	.51
Fit index　GFI=.997　AGFI=.991　CFI= 1	
Ⅳ.他者の死を受けとめる能力（ α =.605）	
身近な人でない限り、誰が死んでも私には関係ない。	.78
報道される赤の他人の死を、自分や親しい人の死と重ね合わせることができる。	.47
戦争・事故などで死者が出たことはまるで他人事のように感じる。	.46
戦争・事故などに関する報道から、「死」や「生」に対する考えを深めている。	.41
Fit index　GFI=.987　AGFI=.962　CFI=.977	
Ⅴ.死を意味あるものと認める能力（ α =.620）	
「死」は「生」を意味付けるものだと思う。	.74
「死」について考えるからこそ、命あることに感謝できるのだと思う。	.73
「生きていること」そのものが尊いと思う。	.41
「死」は人間にとって必要なものである	.36
Fit index　GFI=.974　AGFI=.87　CFI=.928	

「死ぬときに満足できるよう、悔いのない人生を送ろうと思う」、「『死』とは避けがたいものである」、「人生には限りがあるからこそ、一生懸命生きたいと思う」、「人が『死ぬ』ことは仕方のないことだと思う」、「どうせ死ぬのなら、生きていても仕方がないと思う」、「いつ訪れるかわからない『死』について考えることは無駄である」、「『死』とは否定しがたいものである」を除外した。また、各項目間において、きわめて高い相関はみられなかった。

残りの29項目について、因子分析（最尤法、Promax回転）を行った。その結果、5因子が抽出された。因子数の決定は、スクリープロットを参考に、各因子に含まれる項目数及び、因子としての解釈可能性を考慮して決定した。

次に、因子を構成する項目を選定するためステップワイズ因子分析を行った。そして、適合度を低くしている項目、意味的に因子を構成するのに妥当でない項目、1つの因子の因子負荷量が小さい項目、共通性が低い項目を総合的視点から検討し、「家族や親しい人の死を想像することができない」、「家族や親しい人の死について考えると怖い」、「『死』とはどういうものか知っている」、「たとえ小説でも、人が死ぬ場面は不快だと思う」、「戦争・事故などによる死を、現実に起こりうることとして直視することができる」、「死に関する映像を見ると目をそらしてしまう」の項目を除外した。

さらに、各因子の適合度の検定において、GFI（Goodness of Fit Index）、AGFI（Adjusted GFI）、CFI（Comparative Fit Index）を用いた。GFIについては0.90以上（豊田，1992；狩野・三浦，2002）、AGFIについては大きい値ほどよいモデルを示しており（狩野・三浦，2002）、CFIは0.90以上（豊田，1992）が推奨されているため、この基準を用いた。この結果、すべての因子において高い適合度が得られた。抽出された5因子は以下に示したとおりである（表1）。

第1因子には、「自分の死について真剣に考えることができる」、「『死』とはどういうものかを考えることができる」、「自分の死について誰かと語ることができる」「家族や親しい人の死についてだれかと語ることができる」、「家族や親しい人の死について真剣に考えることができる」という5項目が含まれていた。これらは、死について考え、そのことについて誰かに話すことができるかどうかをたずねる項目であったので、この因子を「身近に起こりうる死について考える能力」とした。

第2因子には、「自分の死に対して心の準備をすることができる」、「家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる」、「たとえ自分が将来死ぬことになっても冷静に対処することができると思う」、「たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う」、「『死』をごく自然なものであると受けいれることができる」の5項目が含まれていた。これらは、身近に起こりうる死を当然のこととして受けとめ、対処することができるかどうかをたずねる項目であったので、この因子を「身近に起こりうる死に対処する能力」とした。

第3因子には、「自分が死ぬのはまだまだ先のことであり、考える必要はない」、「現在の自分には、『死』は関係ないと思う」、「自分の生活において『死』は決して遠いものではない」、「いつ訪れるかわからない『死』について普段から考えることは不快である」、「自分の死を想像することができない」の5項目が含まれていた。これらは、日ごろ、どのくらい「死」を身近なものとして考えているかをたずねる項目であったので、この因子を「死に対する親和性」とした。

第4因子には、「身近な人でない限り、誰が死んでも私には関係ない」、「報道される赤の他人の死を、自分や親しい人の死と重ね合わせることができる」、「戦争・事故などで死人が出た

ことはまるで他人事のように感じる」、「戦争・事故などに関する報道から、『死』や『生』に対する考えを深めている」という4項目が含まれていた。これらは、第3者の死を身近に起こりうるものとして捉えることができるかどうかをたずねる項目であったので、この因子を「他者の死を受けとめる能力」とした。

第5因子には、「『死』は『生』を意味付けるものだと思う」、「『死』について考えるからこそ、命あることに感謝できるのだと思う」、「『生きていること』そのものが尊いと思う」、「『死』は人間にとって必要なものである」という4項目が含まれていた。これらは、いつか死ぬからこそ、命あること、生きていることが意味を持つのだという考え方についてたずねる項目であったので、この因子を「死を意味あるものと認める能力」とした。

また、各因子の内的整合性を検討するために、信頼性係数として、Cronbach の α 係数を算出したところ、すべての因子において高い信頼性が得られた（順に α=.83；α=.76；α=.75；α=.61；α=.62）

3—2．因子間相関

・また、抽出した5因子について、因子間相関を算出した。その結果、第1因子「身近に起こりうる死について考える能力」と第3因子「死に対する親和性」に強い正の相関が見られた（r=.56, p<.01）。第4因子「身近に起こりうる死について考える能力」と第2因子「身近に起こりうる死に対処する能力」（r=.49,p<.01）、第1因子「身近に起こりうる死について考える能力」と第4因子「他者の死を受けとめる能力」（r=.32,p<.01）、第2因子「身近に起こりうる死に対処する能力」と第3因子「死に対する親和性」（r=.36, p<.01）に中程度の正の相関が見られた。第1因子「身近に起こりうる死について考える能力」と第5因子「死を意味あるものと認める能力」（r=.29, p<.01）、第3因子「死に対する親和性」と第4因子「他者の死を受けとめる能力」（r=.26, p<.01）、第3因子「死に対する親和性」と第5因子「死を意味あるものと認める能力」（r=.17, p<.05）、第4因子「他者の死を受けとめる能力」と第5因子「死を意味あるものと認める能力」（r=.23, p<.01）に弱い正の相関が見られた（表2）。

表2　Death Competency 尺度の因子間相関

	身近に起こりうる死について考える能力	身近に起こりうる死に対処する能力	死に対する親和性	他者の死を受けとめる能力	死を意味あるものと認める能力
身近に起こりうる死について考える能力	—	.48**	.56**	.32**	.29**
身近に起こりうる死に対処する能力		—	.36**	.07	.08
死に対する親和性			—	.26**	.17*
他者の死を受けとめる能力				—	.23**
死を意味あるものと認める能力					—

**:p<.01, *:p <.05

3－3 尺度との相関

Death Competency 尺度の妥当性を検討するため、Death Competency 尺度の下位尺度と、丹下（1999）の青年期における死に対する態度尺度における下位尺度についての相関分析を行った。第1因子「身近に起こりうる死について考える能力」は、「青年期における死に対する態度尺度」の下位尺度「人生に対して死がもつ意味」との間に中程度の正の相関が見られた（r=.34, p<.01）。

第2因子「身近に起こりうる死に対処する能力」は、「死に対する恐怖」に中程度の負の相関（r=－.40, p<.01）、「生を全うさせる態度」との間に弱い負の相関（r=－.25, p<.05）が見られた。また、「死の軽視尺度」との間に弱い正の相関（r=.19, p<.05）が見られた。

第3因子「死に対する親和性」は、「死に対する恐怖」との間に中程度の負の相関（r=－.30, p<.01）、「生を全うさせる意志」との間に弱い負の相関（r=－.17, p<.05）、「死を意味あるものと認める能力」との間に弱い正の相関（r=.21, p<.01）が見られた。

第4因子「他者の死を受けとめる能力」については、「生を全うさせる意志」（r=.19,p<.01）、「人生に対して死がもつ意味」（r=.27, p<.01）、「死後の生活の存在への信念」（r=.19, p<.01）との間に弱い正の相関、「死の軽視」との間に強い負の相関（r=－.60, p<.01）、「身体と精神の死」との間に弱い負の相関（r=－.19, p<.01）が見られた。

第5因子「死を意味あるものと認める能力」は、「人生に対して死がもつ意味」との間に強い正の相関（r=.71, p<.01）、「生を全うさせる意志」（r=.19, p<.01）、「死後の生活の存在への信念」（r=.21, p<.01）との間に弱い正の相関、「死の軽視」との間に弱い負の相関（r=－.25, p<.01）が見られた（表3）。

表3　Death Competency 尺度と「青年期における死に対する態度尺度」との相関

		Death Competency				
		身近に起こりうる死について考える能力	身近に起こりうる死に対処する能力	死に対する親和性	他者の死を受けとめる能力	死を意味あるものと認める能力
青年期における死に対する態度尺度	死に対する恐怖	-.05	-.40 **	-.30 **	-.10	.12
	生を全うさせる態度	-.04	-.25 **	-.17 *	.19 **	.19 **
	人生に対して死が持つ意味	.34 **	.10	.21 **	.27 **	.70 **
	死の軽視	-.06	.19 **	-.04	-.60 **	-.25 **
	死後の生活の存在への信念	.04	-.08	-.11	.19 **	.28 **
	身体と精神の死	-.09	.09	.02	-.19 **	.03

**:p<.01, *:p<.05

また、Templer の「死への不安尺度（Death Anxiety Scale）」と Death Competency 尺度との相関について調べた。この結果、「身近に起こりうる死に対処する能力」との間に中程度の負の相関（r=－.42, p<.01）、「死に対する親和性」との間に弱い負の相関（r=－.20, p<.01）、「他者の死を受けとめる能力」（r=.24, p<.01）、「死を意味あるものと認める能力」（r=.18, p<.01））

との間に弱い正の相関が見られた。尺度得点の合計と Death Anxiety Scale の尺度得点との間にも弱い負の相関が見られた（r=－.14, p<.05）（表 4）。

表 4 Death Competency 尺度と Death Anxiety Scale との相関

	Death Anxixety Scale
身近に起こりうる死について考える能力	-.05
身近に起こりうる死に対処する能力	-.44 **
死に対する親和性	-.20 **
他者の死を受けとめる能力	.24 **
死を意味あるものと認める能力	.18 **
尺度得点合計	-.14 *

**:p<.01, *:p<.05

近親者との死別経験の有無が Death Competency に与える影響について、各因子の尺度得点と、尺度得点の合計について t 検定を行った。この結果、近親者との死別を経験した人は、経験していない人に比べて、「身近に起こりうる死について考える能力」（t=2.39, p<.05）、「死に対する親和性」（t=2.20, p<.05）、および尺度得点の合計が有意に高いということが分かった。（表 5）。

表 5　死別経験の有無による t 検定の結果

	経験あり (N=１３５)	経験なし (N=８２)	t 値
	平均 (SD)	平均 (SD)	
身近に起こりうる死について考える能力	22.58 (6.39)	20.44 (6.41)	2.39 *
身近に起こりうる死に対処する能力	17.19 (6.13)	16.07 (5.75)	1.33
死に対する親和性	24.16 (6.00)	22.38 (6.12)	2.20 *
他者の死を受けとめる能力	16.80 (5.10)	16.26 (5.32)	0.75
死を意味あるものと認める能力	19.79 (4.42)	19.24 (4.68)	0.87
尺度得点合計	100.52 (18.02)	94.39 (19.99)	2.33 *

*:p<.05

次に、死別経験のある人のみを、最近 5 年以内に死別を経験した人、5 年～10 年以内に死別を経験した人、10 年以上前に経験した人に分類した。そしてこの 3 群について分散分析を行っ

たところ、第2因子「身近に起こりうる死に対処する能力」の尺度得点のみ、5%水準で有意差が見られた（$F(132, 2) = 3.30$, $p<.05$）。さらに第2因子について Tukey 法による多重比較を行った結果、最近5年以内に死別を経験した人は5年～10年以内に死別を経験した人より有意に高かった（表6）。

表6　死別経験からの年数による分散分析の結果

	5年前以内 (N=78)	5年～10年前 (N=38)	10年以上前 (N=19)	F値
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	
身近に起こりうる死について考える能力	23.09 (5.78)	21.97 (4.22)	21.63 (6.84)	0.63
身近に起こりうる死に対処する能力	18.06 (6.49)	15.11 (5.53)	18.11 (4.89)	3.30 *
死に対する親和性	24.54 (5.67)	23.92 (5.57)	22.21 (5.87)	1.30
他者の死を受けとめる能力	16.69 (5.08)	16.63 (5.63)	17.89 (4.36)	0.46
死を意味あるものと認める能力	20.17 (4.22)	19.42 (4.44)	19.37 (5.29)	0.49

*:$p<.05$

またフックス（1975）によると、10歳ころになると自然死の概念に到達し、死とは生物学的過程の一つであることと理解するようになる（山本，1996）。そこで、死別経験を持つ人を、10歳以内で死別を経験した人と、それ以降に死別を経験した人に分類して、各因子の尺度得点および尺度得点の合計に差が見られるかを検討したが、有意差は見られなかった（表7）。

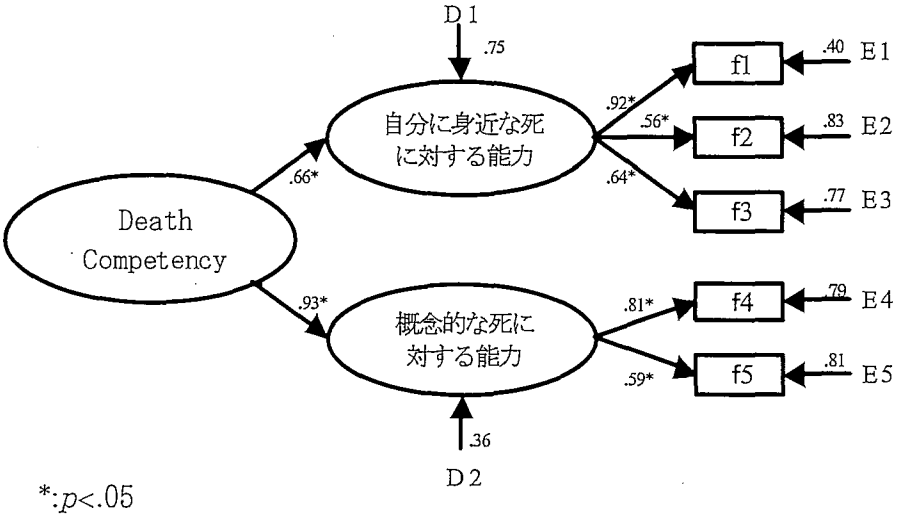
表7　死別経験の時期によるｔ検定の結果

	10歳以下 (N=29)	11歳以上 (N=106)	t 値
	平均 (SD)	平均 (SD)	
身近に起こりうる死について考える能力	21.66 (6.33)	22.82 (6.42)	-0.87
身近に起こりうる死に対処する能力	16.17 (5.18)	17.53 (6.36)	-1.06
死に対する親和性	23.52 (5.40)	24.18 (5.77)	-0.56
他者の死を受けとめる能力	17.38 (5.20)	16.70 (5.12)	0.63
死を意味あるものと認める能力	20.07 (4.96)	19.78 (4.29)	0.31
尺度得点合計	103.34 (0.67)	105.26 (0.76)	-0.36

3－5．検証的因子分析

探索的因子分析の結果に準じて、さらに解釈を容易にするために、抽出された因子の第1、2、3因子を「自分に身近な死に対する能力」、第4、5因子を「概念的な死に対する能力」と

したモデルを作成し、 構造方程式モデリングを用いて、最尤法による検証的因子分析を行った（図1)。



*:p<.05

図1 Death Competency を構成する因子の検証的因子分析（N=217)

分析の結果、このモデルの適合度は x^2= 8.252, p=.083, CFI=.981, GFI=.986, AGFI=.946, RMSEA=.07 であった。

さらに、検証的因子分析の結果より分類された「自分に身近な死に対する能力」、「概念的な死に対する能力」と「死への不安尺度」との相関をみた。その結果、「自分に身近な死に対する能力」は死の不安と有意な負の相関（r=－.27）が見られ、「概念的な死に対する能力」は有意な正の相関（r=.23）が見られた（表8)。

表8「自分に身近な死に対する能力」・「概念的な死に対する能力」と、死への不安尺度との相関分析の結果

	Death Anxiety Scale
自分に身近な死に対する能力	-.271**
概念的な死に対する能力	.229**

**p<.01

4．考察

4－1．尺度の信頼性・妥当性の検討

本研究では、大学生、大学院生を対象として収集したデータに対する因子分析を行い、5因子23項目からなる尺度を作成した。この尺度は、「身近に起こりうる死について考える能力」・「身近に起こりうる死に対処する能力」・「死に対する親和性」・「他者の死を受けとめる能力」・「死を意味あるものと認める能力」の5因子から構成されることが示され、各因子の適合度の検定においてもすべての因子で高い適合度が得られた。よってDeath Competency尺度の構造的妥当性は確認されたといえる。また、Cronbachのα係数も高い値であり、Death

Competency 尺度の内的整合性も確認されたといえる。因子間相関については、「身近に起こりうる死に対処する能力」と「死への親和性」との間がやや高いものの、他の因子間の相関は.50 未満であり、冗長性が認められるほどではなかった。

そして、丹下（1999）による青年期における死に対する態度尺度との関連から、尺度の基準関連妥当性について検討した。その結果、「身近に起こりうる死に対処する能力」・「死に対する親和性」は「死に対する恐怖」と反対の態度であることがわかった。「他者の死を受けとめる能力」については、「死の軽視」と反対の態度であった。また、「死を意味あるものと認める能力」は、「人生に対して死が持つ意味」と対応した態度であった。さらに、

Templer の「死への不安尺度（Death Anxiety Scale）（Templer, 1970）」との関連からも検討したところ、死に対する不安が低いほど、「身近に起こりうる死に対処する能力」・「死への親和性」が高いといえることがわかった。以上のことから、死に対して恐怖や不安を抱く、あるいは死を軽視するといった態度と比べると、Death Competency 尺度で測定される死に対する態度は、死を肯定的に捉えようとする態度であるといえる。死を肯定することができれば、死を受けとめ、対処するという態度につながると考えられる。

以上から、本尺度は死に対処する能力を測定する尺度としての基準関連妥当性を確認したと考えられる。

4―2．Death Competency

Death Competency 尺度は、先にあげた 5 因子から成り立っていた。ここでは、この 5 つの能力を定義し、特に死に対する不安・恐怖との関連と死別経験の有無との関連から、Death Competency の構造について考える。

(1) Death Competency を構成する因子の定義

①「身近に起こりうる死について考える能力」

「身近に起こりうる死について考える能力」は、自分にいつかは起こりうる死、あるいは家族や親しい人の死など、自分にとって身近な死について自ら積極的に考え、それを表現することができる能力だと定義できる。この能力には、死の不安尺度の尺度得点や、青年期における死に対する態度尺度の「死の恐怖」尺度の得点との関連は見られなかった。よって、不安や恐怖の強いからといって、死について考えたり、その考えを表現したりすることができないというわけではないことがいえる。

また、この能力は近親者との死別経験が無い人より、死別経験のある人の方が有意に高い。これは、死別を経験することにより、現実的に死について考え、周りの人々と話したりするきっかけが与えられたためと考えられる。

②「身近に起こりうる死に対処する能力」

「身近に起こりうる死に対処する能力」は、自分にとって身近な死を想定し、いつかは来る死に対して心の準備をし、冷静に対処しようとする能力であると定義できる。この能力は、死の不安尺度の尺度得点や、青年期における死に対する態度尺度の「死の恐怖」尺度の得点が低いほど高くなるものである。つまり、死に対して不安や恐怖が高いと、身近に起こりうる死に対処できなくなる傾向がある。また、「身近に起こりうる死について考

える能力」との関連から、身近な死について考え、表現できるほど、死に対して準備、対処できる傾向があると考えられる。

この能力は、死別経験の有無によって有意な差がみられなかった。このことから、死別経験をしたからといって、身近に起こりうる死に対して冷静に対処できるわけではないといえる。

③「死に対する親和性」

「死に対する親和性」は、自分自身にとって死はいつか訪れるものであるという現実を受けとめ、死を身近なものとして捉えることができる能力と定義できる。この能力は、死の不安尺度の尺度得点や、青年期における死に対する態度尺度の「死の恐怖」尺度の得点との関連から、死に対する不安や恐怖が高ければ、死を身近なものとして捉えることができないということが考えられる。

また、この能力について、Death Competency 尺度の因子である「身近に起こりうる死について考える能力」との関連から、身近に起こりうる死について考え、語ることができるほど、死に対して親和性を持つことができるといえる。また、近親者との死別経験がある人のほうが、死別経験のない人に比べて「死に対する親和性」が高い。したがって、「死に対する親和性」は、近親者との死別経験や、身近に起こりうる死について考えることによってあがると考えられる。以上のことから、デス・エデュケーションによって死について考えるきっかけが与えられることで、ある程度死を身近なものであると考えることはできるが、いつかは自分に訪れる死を、現実として受けとめるきっかけは、実際に死別を経験することで与えられるのではないかと考えられる。

④「他者の死を受けとめる能力」

「他者の死を受けとめる能力」は、戦争や事故の報道や小説の中での死の場面など、自分と関係のない人や現実でない人の死に対して、自分とは関わりのないものとするのではなく、自分や親しい人にも起こりうる現実として捉え、それをきっかけとして死について考えようとする能力であると定義できる。この能力には、死の不安尺度の尺度得点や、青年期における死に対する態度尺度の「死の恐怖」尺度の得点との関連は見られず、不安や恐怖の強さがこの能力に影響を与えるわけではないことがいえる。

この能力は、青年期における死に対する態度尺度の「死の軽視」尺度で測られる、死を他人事として考えたり、死を苦痛からの解放と考えたりする態度とは矛盾したものである。さらに「身近に起こりうる死について考える能力」・「死に対する親和性」との関連から、この能力は、「死」を日ごろどれだけ考え、身近なものとして捉えようとしているかを反映する能力であるといえる。よって、デス・エデュケーションによって死について考えるきっかけを与えられることで、「他者の死を受けとめる能力」もある程度向上するのではないかと考えられる。

⑤「死を意味あるものと認める能力」

「死を意味あるものと認める能力」は、「死」が「生」に対して肯定的な意味を持つと考えることによって、「死」をポジティブなものとして捉えようとする能力であると定義で

きる。この能力では、死の不安尺度の尺度得点や、青年期における死に対する態度尺度の「死の恐怖」尺度の得点との関連は見られず、不安や恐怖が強いからといって死を肯定的に捉えることができないというわけでも、不安や恐怖が強いからこそ肯定的に捉えようとしているわけでもないことがうかがえる。

この能力は、経験の死別有無による有意差は見られなかった。このことから、死を肯定的に捉えようとする態度には死別経験の有無は関係していないことがいえる。この能力は、どうしても否定的に捉えがちになってしまう「死」に対するイメージを、人生観・生命観との関連からできるだけ肯定的に捉えようとする、いわば「発想の転換」としてのものではないかと考えられる。よって、生命観や人生観についても触れることで、デス・エデュケーションの中である程度イメージを形成し、この能力を向上させることは可能ではないかと考えられる。

(2) Death Competency の構造

探索的因子分析の結果、他者の死に対する態度であるか、自分、あるいは家族や親しい人の死に対する態度であるかによって、対処の仕方が分類された。対象が他者である場合は「他者の死を受けとめる能力」というひとつの因子として分類され、自分、あるいは家族や親しい人を対象とする場合は、「身近な死」について考える態度と、「身近な死」に対処する態度という行動の違いによって分類されるという結果になった。このことから、想定する死の対象が身近な人物であれば、考え方や対処の仕方などに違いは見られないということが考えられる。しかし、自分とは直接関係のない他者の死については、「身近な死」とは異なる捉え方をしているといえる。

さらに、「身近に起こりうる死について考える能力」、「死に対する親和性」については近い過去に死別を経験することによって影響を受けることがわかった。「身近に起こりうる死に対処する能力」についても、統計的な有意差は認められなかったものの、死別を経験した人のほうが高いという傾向が見られた。これらはともに「自分にとって近い死」、すなわち自分自身・家族や親しい人の死に対する能力であるといえる。一方、有意差の見られなかった「他者の死を受けとめる能力」・「死を意味あるものと認める能力」については、自分にとって身近ではない死、あるいは「死」という概念をいかに捉えるか、ということに関するものである。

このように、Death Competency は、実際の死別経験によって影響を受ける「自分に身近な死に対する能力」と、実際に死別を経験するかによってではなく、「死」についてどれだけ考えているかということが影響していると考えられる「概念的な死に対する能力」に分類されると考えられる。

4—3．デス・エデュケーションによって変化しうる能力についての考察

死への不安尺度（Death Anxiety Scale）（Templer, 1970）と Death Competency 尺度の因子との関係から、死に対する不安が低いほど「自分に身近な死に対する能力」が高くなる。一方、「概念的な死に対する能力」については、死に対する不安が高いからといって能力が低いわけではない。このことから、死に対処するための能力は死の不安だけで説明できるものだけではく、デス・エデュケーションによって得られる変化は、不安の軽減ばかりで測られるものではないと考えられる。

デス・エデュケーションは、普段あまり死について考えない人でも、改めて「死」について考えるきっかけとなるものである。デス・エデュケーションの形式は様々であるが、その目的は死を避けるのではなく、あるがままとして捉え、より身近なものとして考えようとするところにある。それゆえ、「死」に対する概念に対する受けとめ方については、デス・エデュケーションによって「死」について考える機会が与えられることで、より深められると考えられる。しかし一方で、死別経験もなく、自分自身が死のふちに立ったことがなければ、死を身近なものとして捉えることは大変難しい。デス・エデュケーションを行った直後では、死を身近なものとして受けとめていたとしても、それは一時的なものに過ぎない可能性もある。今回の分析の結果からも、死をいかに身近なものとして受けとめるか、ということに関しては、実際の経験による影響が大きいということがうかがえる。むしろデス・エデュケーションは、死を身近なものとしてとらえる態度に変化を及ぼすものではなく、死について積極的に考え、受けとめようとする態度に影響を与えるものではないかと考えられが、この点については今後検討する必要がある。

4—4．デス・エデュケーションにおける Death Competency 尺度の有効性

調査の結果、Death Competency は不安・恐怖が軽減したからといって高くなるわけではないことがわかった。このことから、これまでのデス・エデュケーションの効果測定の主流である不安・恐怖の軽減では、これらの能力の変化を明らかにすることができず、デス・エデュケーションの効果の測定に十分ではないと考えられる。したがって、デス・エデュケーションによる様々な変化を測定するためには、Death Competency 尺度が有効だと言える。

4—5．今後の課題と展望

今回の尺度作成では、死後の世界など、宗教観に関する信念の有無については触れなかった。なぜなら、日本人の多くが特定の宗教を信仰していないため、信念として扱いにくいのではないかと考えたからである。しかし、丹下（1999）の尺度との相関によると、「死後の生活の存在への信念」は、「他者の死を受けとめる能力」・「死を意味あるものと認める能力」との間に低い相関が見られた。このことから、概念としての「死」について考えるとき、宗教を信仰しているか否かにかかわらず、何らかの形での信念が存在しているのかもしれない。また、死を苦痛からの解放として考える態度については、いつかは訪れる死に対処する能力としては適切ではないという判断から本研究では扱わなかった。だが、「身近に起こりうる死に対処する能力」と「死の軽視」との間に正の相関が見られた。「死に対処する能力」を、逃避としての死という考え方の影響を受けないと考えるならば、今回 Death Competency 尺度では、身近な死に対処する能力として測定されたものが、本当に対処能力のみを測定できているのかがわからないものとなってしまった。死の受けとめ方が、どのような考えに基づいたものであるかは、今後さらに細かく検討する必要がある。

また、本尺度はデス・エデュケーションの効果を測定するために作成した尺度である。これがデス・エデュケーションの効果を測定する尺度として適しているか、デス・エデュケーションによって死に対処する能力にどのような変化が現れるのかについて、さらに検討する必要がある。

5．引用文献

Bentler, P. M. 1995 *EQS ; Structural equations program manual.* CA : Multivariate Software Inc.

Bugen, L. A. 1980-81 Coping: Effects of death education. *Omega,* **11**, 175-183.

フックス　1975　現代社会における死の諸像　池田芳一・日向信夫訳　誠信書房.

今井幸太郎 1991 死別体験の意義―“死”の心理と教育（Ⅳ）―龍谷大学論集, **437**, 2-20.

Kano, Y., & Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika,* **65**, 7－22.

狩野裕・三浦麻子 2002 グラフィカル多変量解析－目で見る共分散構造分析－ 現代数学社

Klug, L., & Sinha, L. 1987 Death acceptance : A two-component formulation and scale. *Omega,* **18**, 229-235.

Kübler-Ross, E. 1969 *On death and dying.* New York: Macmillan.

Lester, D. 1990 The Collett-Lester fear of death scale: The original version and a revision, *Death Studies,* **14**, 451-468.

Peal, R. D., Handal, P. J., & Gilner, F. H. 1981-82 A group desensitization procedure for the reduction of death anxiety. *Omega,* **12**, 61-70.

Robbins, R. A. 1990-91 Bugen's coping with death scale: Reliability and further validation. *Omega,* **22**, 287-299.

Robbins, R. A. 1994 Death Competency: Bugen's coping with death scale and death self-efficacy. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.149-165). Washington, DC: Taylor & Francis.

Spss Inc. 2000 Spss Base 10.0 Applications Guide. Spss Inc.

丹下智香子　1999　青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. 心理学研究, **70**, 327 - 332.

Templer, D. L. 1970 The Construction and Validation of a Death Anxiety Scale. *The Journal of General Psychology,* **30** (4), 165-177.

豊田秀樹　1992　SAS による共分散構造分析 東京大学出版会.

山本俊一　1996　死生学－他者の死と自己の死－, 医学書院 , pp.150.

White, P. D., Gilner, F. H., Handal, P. J., & Napoli, J. G. 1983-84 A behavioral intervention for death anxiety in nurses. *Omega,* **14**, 33-42.

Wong, P. T. P., Reker, G. T., & Gesser, G. 1994 Death Attitude Profile-Revised: A multidimensional measure of attitudes toward death. In Neimeyer R.A. (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.121-148). Washington, DC: Taylor & Francis.